

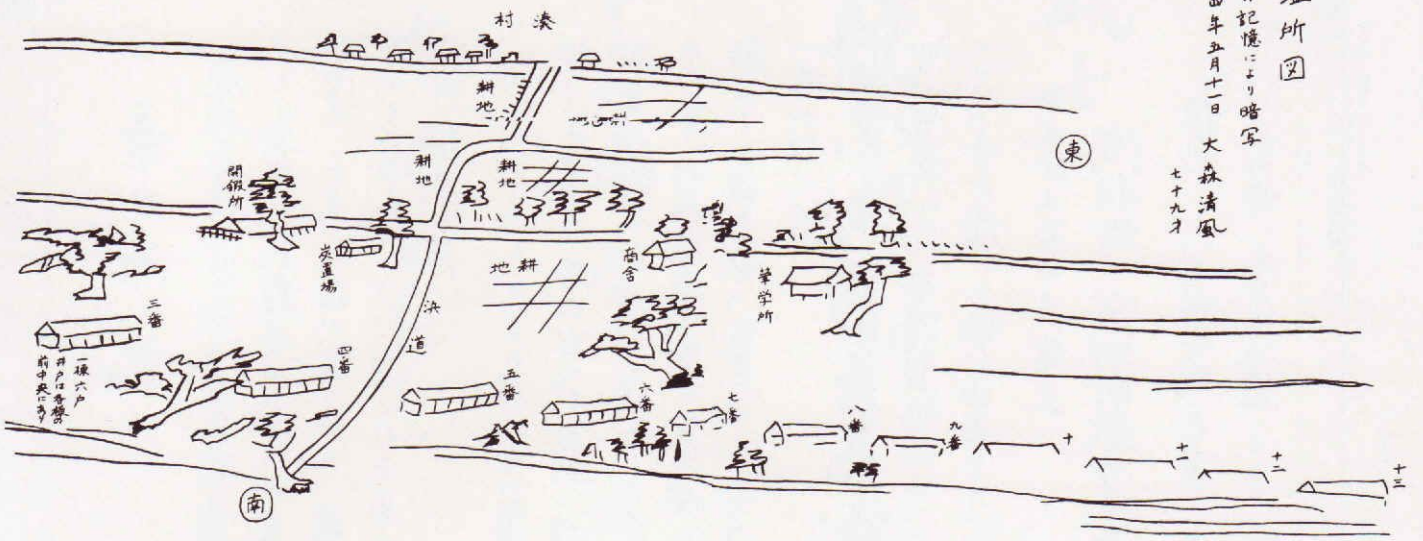
# 幸浦の碑

平成十三年十月建立

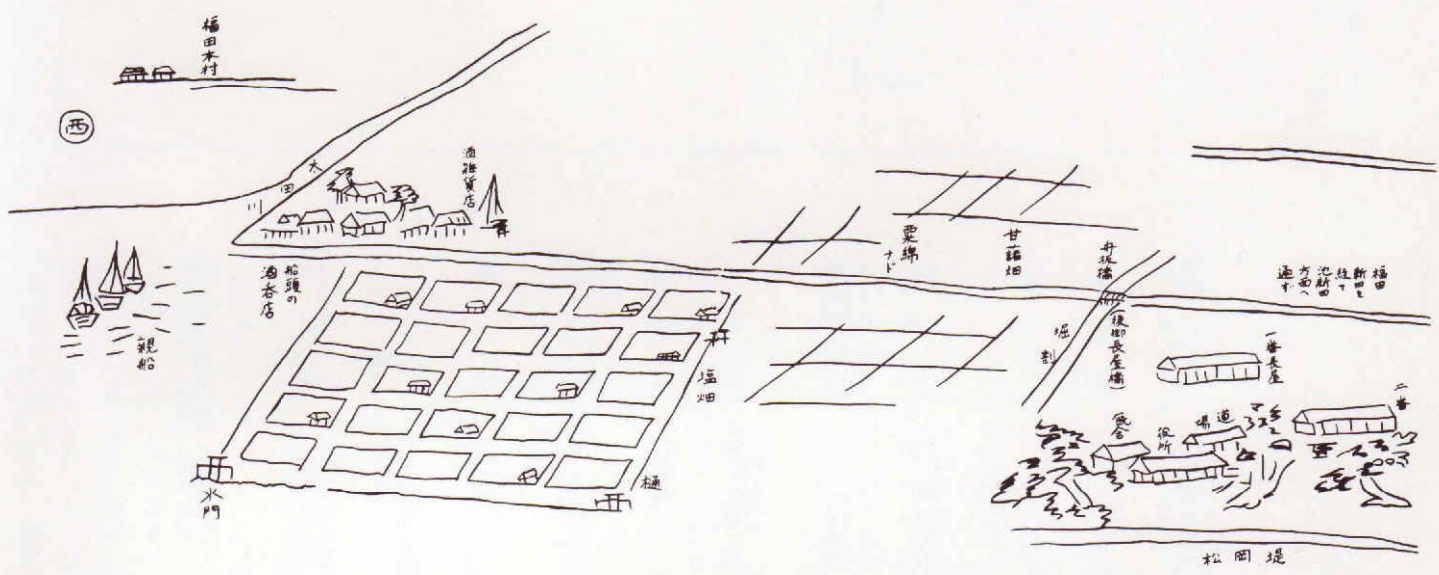


湊製塩所図

子供の時の記憶により暗写  
昭和十四年五月十一日 大森清風  
七十九才



下図へ続く





武士の

競ふ網曳きの海幸に

幸の浦々

末栄やりし

一翁

詠者

大久保一翁公

文化十四年（一八一七）、江戸に生る。名は忠寛。三河以来の旗本にありながら早くから大政奉還を唱えた開明派幕臣。

元治二年（一八六五）、四九歳で隠居し、一翁と称する。

大政奉還後、慶応四年（一八六八）、会計総裁となったが徳川慶喜の意向をくみ、陸軍総裁 勝 海舟と共に恭順論を唱え、徳川家救済・江戸無血開城に尽力。

同年五年、徳川家達が駿河・遠州七十万石に封ぜられると、家達を補佐して藩政をとり、版籍奉還後の明治二年（一八六九）八月、静岡藩権大参事、廢藩置県後の四年十一月、静岡県参事となる。

明治五年、文部省二等出仕、同年東京府知事、十年元老院議員に任じられる。

子爵を授けられ、従二位、勲二等に叙せられ旭日重光章を受ける。明治二十一年七月没。享年七十二歳。

揮毫

大久保安威氏（九八歳）東京都渋谷区 在住

現在 工学博士

同和鉱業社友

（学）東京文化学園顧問

一翁公子息 立（海軍造船中将・貴族院議員）の二男として明治三四年神奈川県横須賀に生る。

昭和三年、帝国大学工学部冶金学科卒業。直ちに東洋鉱山株式会社に入社し常務取締役を歴任。

昭和十七年、マレー半島ベナン錫精錬所所長、同支社長。昭和二十一年英軍收容所より帰還。

昭和二十三年、同和鉱業に入社し常務取締役を歴任。

昭和五三年、同和鉱業と新日鐵合併の光和精鉱設立と共に副社長、社長、会長となる。この間、学校法人東京文化学園理事長に就任。平成十一年四月退任、顧問となり現在に至る。

# 幸の浦記

慶応三年（一八六七）大政奉還、王政復古、  
そして將軍徳川慶喜は隠居、田安亀之助  
（家達一六歳）が徳川家を嗣ぎ、駿遠二国  
七十万石を与えられ、多くの元幕臣たちと  
静岡へ移ってきた。

明治三年（一八七〇）三月、静岡藩の製塩事業を  
請けて元幕臣約三百人が漆村へ移り住み、  
製塩方頭取 松岡 萬が藩方に挨拶に伺った。  
そのおり 静岡藩権大参事 大久保一翁から  
励ましと餞の歌「武士の……幸の浦……」  
一首が贈られた。

明治二十二年（一八九九）湊 太郎助・西同登・寄木  
四ヶ村の合併により幸浦村が誕生した。この村名は  
この「幸の浦」の歌に由来している。

平成十三年十月建立

## 浅羽町・浅羽町教育委員会

揮毫 大久保安威（九十八歳）一翁公 孫

協力者 大久保忠昭（当主）一翁公曾孫

## 幸浦の碑概要

所在地 静岡県磐田郡浅羽町東同笠

浅羽町親水公園内

建 立 浅羽町・浅羽町教育委員会

揮 毫 大久保安威（九十八歳）一翁公 孫

解説文（考案） 浅羽町元町史編さん室長・柴田静夫

（揮毫） 浅羽町元教育長・岡本幸夫

使用石材 だてかんむり 伊達冠石

施 工 静岡県袋井市西田四三一一

株式会社 石亀石材店

事業費 二〇三万円

建立日 平成十三年十月